

ギャグで生きたいムテ
キ生

無個性のソーイお茶書き

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ハイパームテキになった主人公が日々を面白おかしく過ごせたらいいなーと思いがら生きるだけ。

諸事情によりデータがぶっ飛んだため、同じ境遇の友人と合併して再投稿するのです。

目次

プロローグ的な何か(要は駄文)

1

☒の妖精

—————

5

吸血鬼に、変身ッ!

—————

10

名は体を表す

—————

20

勝負前夜

—————

28

開幕

—————

32

プロローグ的な何か（要は駄文）

俺の名はハイパームテキ。比喩でもなんでもなく、無敵ガシヤットだ。

ん？そこは無敵ゲーマーじゃないのかつて？

いやいや俺もそうなりたかったんだよ。だがな、俺の転生担当の勘違いで、俺が、

『ハイパームテキになりたい』

って言ったたら、本当にハイパームテキにしてくれたんだ。……ただし、ハイパームテキ【ガシヤット】に、な。しかも、森に放置だよこんちきしよう。

しかもなんか怪しい霧が立ち込めてるし誰も拾いに來るフラグゼロって言う最悪の立地。

だが、俺の特性は文字通りムテキ。この黄金のボディが傷つく事はないし、錆びる事もない。時が過ぎて朽ち果てるって事もない。……それはつまり、誰かに拾われるまでたつた一人、いや一個だ。精神崩壊するよ？いいの？体は無敵でも心はガラスハートよ？

永夢さんみたいに強ハートじゃないよ？泣き虫だよ？

だれか助けてー！

分かってる。お約束的なやつだもんな。

それじゃ、この森を探検しますかね。

レッツゴー！（マリオ風

『ドーキドキ！』（ルイージ風

『……………あれ？ハグは？』

実体が俺しかないので無理です。

『あああああんまりだあああああああああ!!』

☒の妖精

森を歩く事数時間。取り敢えず霧の深いところは抜けたけど、依然森の中。マイナスイオン美味しいです。

『この辺り、解析したところ身体に害をなす成分が見受けられます。本当の意味でのマイナスです』

うっへえ、マジか。で、俺にそれが効かないのは？

『その姿では本来の力には程遠いですが、常時無敵なのでダメージは一切通りません』
うん知ってた。

流石ムテキボデイ。ノックバツク以外は一切攻撃を通さないだけある。

戦闘して、

「フハハハ！効かん！」

みたいなのをやってみたいが、自分で考えて胸糞悪くなったので却下だ。平和主義でいこう。戦闘したくねえ。

『フラグ回収しそうな発言です』

やめろマジで起こるかもしれないじゃん。

『……所で、この先に湖が存在するようですが、行ってみませんか?』

急な振りだな。まさか、その先に厄介そうな奴がいるとかじゃないよね?

『さあ行きましょう!』

「誤魔化しやがった!」

思わず声に出してしまったが、本当にやだからね?

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「そこのお前!ここで何しているんだ!」

「ち、チルノちゃん!やめようよ!霊夢さんに怒られるよ!」

「ナビの野郎後で覚えとけよ」

フラグ回収乙。

いつくら俺がにわかだってチルノくらいわかるぞ。

あと、隣にいるのは……大妖精?だっけ?

多分そうだ。きつとそうだ。

ていうか、湖って時点で怪しいと思ったんだ。大分奥の方に紅魔館らしきものも見えるし、ここは幻想郷で間違いないな。

「おいお前!黙っていないで答えろ!それとも、あたいの恐ろしさにおそれをなしたか!?!」

「チルノちゃん、恐れを二回言っちゃってるよ」

「……会話しない訳にはいかないよあ……」

気が滅入る。只でさえ戦いたくないってのに、チルノだと変に勘違いして襲ってくるかもしれないから言葉を選ぶ必要があるし、大妖精がいるからと言っても、ストップが効かないこともあるだろう。逃げたいけど、仲良くなっておいて損はないと思うし、なにより木の陰から誰かがこちらを覗いてる。カメラを撮る音が聞こえたから、おそらく文だろうな。ここで逃げ出したら新聞に何て書かれるか分かったもんじやない。

これからのムテキ生に大きな影響を受けてしまうだろう。慎重に、行動せねば。

「………こんにちは」

「あつ、はいこんにちは」

「こんにちはは！」

「今日も暑いですねー」

「わかるのか?! あたいはサイキョーだから消えないけど、ほかの氷の妖精はヤバイんだ

よねー!」

秘技、こんにちはからの世間話。

さらに、大妖精にアイコンタクトで、

「俺に合わせてください」

「分かりました」

軽い意識疎通をする。

そして、穏便に済ませるための作戦を開始した。

「そうなんですか？それは大変ですね。俺……いや、僕も、家の氷が溶けてしまつて。こんな暑い中で氷がないなんて本当気が滅入ります」

「なんだか、私たちと似た悩みを持つているみたいだよチルノちゃん」

「そうだな！氷がないのは本当に困るよな！お前、人間の癖に見所あるぞ！」

チルノは㊦とバカにされる程頭が悪い。

なら、世間話で話を逸^そらせれば、機嫌を良くしてこのまま見逃してくれるかもしれない。

あとは、大妖精のフォローも期待して丸め込む。

「ありがとうございませす……実は、僕はここに氷の最強妖精がいると聞いて訪れたんです。氷を貰えないかな？と、考えて……」

「チルノちゃん！最強だつて！最強のチルノちゃんが頼りにされてるよ！」

「ムツフー！益々気に入ったぞ！特別にあたいが氷を創つてしんぜよう！」

「いいんですか!?!ありがとうございます！流石、最強の妖精！心が広い!……ただ、僕、うっかり、氷を入れる入れ物を落つことしちゃつて。今日は諦めて帰りますけど、また今度来た時に、氷を貰うつてことでもいいですか……?」

「落としたのか！バカだなー！だけどあたいは気分が良いから特別に、そのことを許可しよう！また来てねー！」

「はいっ！また、尋ねさせていただきますね！では、お2人とも、お元気で！」

「バイバーイ！」

「お気をつけてー！」

よっしや！回避成功！

……つてか、この会話つて、チルノは明日になったら忘れてそうだな。

まあ、それはともかく、次は紅魔館にでも行こうかな。

え？地雷丸出しじゃないかって？

執事やってみたいんだよ！

それに、咲夜さんの時止めも俺には通じないと思うから、同じ空間で作業できるっていうメリットもあるしね。……よし、移動開始だ！

行くぞ、クソナビ。

『好感度が大暴落?!』

自業自得だこの野郎。

吸血鬼に、変身ッ!

紅魔館が見えた方向に向かって真つ直ぐ進んでいく途中で熊やら妖怪やらに襲われたけど全力で逃げました。戦闘したくないもん。それに、逃げ足は速いからな。ぶつちぎってやったぜ。

そのかわり迷ったけど。

いやー。どうなってんだよ。こうゆう時、主人公なら迷わず着くはずなのに……。俺が主役じゃないですかそうですか。

『森の中で分からないなら木に登って辺りを見渡してみるといいかと』

えー。でも俺木登れないんだけど。

『なら、鳥に変身して空から行くというのには?』

それだっ! その手があつたよ!

『では、早速……』

…あーちよつと待つて。いいこと思いついた。

『いいこと、ですか? それは一体……?』

これから吸血鬼の館に行くんだし、どうせなら吸血鬼に変身して行った方が好感が待

たれるんじゃないか？

吸血鬼も空飛べるはずだし。

『成る程。打算にまみれてますが、有効な手段だと思えます』

打算言うな。

あつ、でも吸血鬼って日差しを浴びたら灰になるんじゃないっけ？こんな、真昼間に吸血鬼が居たらおかしいんじゃないかな？

『いえ、高位の吸血鬼なら日光を浴びても灰にはなりませんよ？おそらく、人間より肌が荒れるくらいと推測されます』

へー。んじや、力のある吸血鬼で決定かな？

あ、力的には全力の何%くらい？あ、エグゼイドみたいにレベル換算でお願いシヤス。

『計算中……。推定、レベル21』

ん？思ったより低め？

『あくまでも、高位の吸血鬼、という存在の最低値です。最上位個体ですと60にも届き
ます』

そつか。それじゃ、間を取って、30位の吸血鬼に変身しようか。

『承知いたしました。では……』

【輝けー！流星の如く！黄金の最強ゲーマーー！】

【ハイパームテキー！ウアンパーイーアー！】

んー？なんか背が縮んだ気がするんだが。

『強い吸血鬼というのは小さいものです』

そういうもんか？

∴そういえば、レミリアや、フランもちっちゃかったな。多分、あいつらとおんなじくらいの身長になってんだろうな。

∴さて、肝心の俺の見た目だが。

『吸血鬼特有の赤い目に、黒髪。尖った歯。身長は大体レミリアやフランと同じくらい。整った顔をしており、普通に美少年として扱われるでしょう。イメージとしては、P i x i v バージョンのレットがいいかもしれません。』

服装は無地の黒いTシャツに、青のジーパン、といった格好。吸血鬼とはかけ離れて居ますが、気にしないでください』

説明有難う。そんじゃ、飛んでいきますかね。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

【side out】

「……何故一人も来ないの！」

「レミイ落ち着いて。分かりきっていた事じゃない」

紅魔館に存在する図書館にて。

この館の主人である吸血鬼、レミリアと、

別名、動かない大図書館。パチュリーが何故か面接場を設けていた。

しかし、誰一人も来ない現状に納得がいかないようだ。だが、人が来ないのはある意

味当たり前かもしれない。何故なら、

「いくら結婚したいからと言って、ここは森を抜けた先にある最悪の立地だし、お見合い相手を募集しても誰もこないわよ。それに、貴重な我が子を、しかも男を人里の人間が手放すわけが無いじゃない」

「ぐぬぬぬ……」

パチュリーの説明の通り、いくら身を固めたいからと言っても妖怪のである森を誰が好き好んで通ると言うのだろうか？

「そもそも、なんでいきなりこんな事し出したのよ」

「……………私だって、焦るのよ」

「そんなの幻想郷共通の思いじゃない。てか、そんな簡単に結婚できたら、スキマ妖怪が人攫いなんて事しないでしよう?」

「うう……。なんで幻想郷はこんなにも男がいないのよお……」

何やってんだあのBBA。

……………今寒気が。……………まあいい。

さて、このレミリアの発言の言う通り、幻想郷には男が少ない。所謂、あべこべ世界というものである。

なんでも、この幻想郷は男が生まれにくくなっており、男女の比率が1対100程になっっているのだ。

男が産まれた日には集落全体で大騒ぎ。自我がつき始める前から睡をつけておこうと世の女性達は躍起になっている。

無論、貞操概念も逆転しており、女性が訴えられるような時代だ。……ここに、悲しい事件の一部を抜粋したものがあある。

被害者母親。

【買い物に夢中になって、一瞬目を離れた瞬間、息子はそこから消え去っていました。懸命に村の中を探したのですが、中々見つからず、近所の方にもご協力頂いてようやく見つけたんです】

記者

【それで、どのような状態で？】

被害者母親

【10人位のバスでクズな女共にレ〇プされました……。息子は目に光が無くて……。私の大切な息子が、何処とも知らない馬の骨に……。ううつ】

記者

【それはなんと唆る……。いや、酷い状況でしたね……】

被害者母親

【もうあの子の精神状態はボロボロで、家に引きこもって『もう二度とき、外に連れ出さ

ないでくれ。後話しかけんな』何て、泣きながら訴えてきたんです!」

記者

【成る程……。じゃ、なんで貴方が牢屋にいるのですか?】

被害者母親

【そんなの混ざってヤツたからに決まってるじゃないですか! 据え膳食わぬは女の恥イ
!】

記者

【……あれ?もしかして、脱獄して捕まったのって】

被害者母親

【息子に『話しかけんな』と拒絶され気絶したからです】

記者

【まあ、所詮女なんてそんなもんですよねー】

記者、被害者母親

【「アツハツハツハツハハー!」】

アツハツハツハツハハー、じゃねえ。

ま、まあ、こんな感じで男は貴重なのだ。

というか、この事件が起こってからいよいよ男が外に出たがらなくなった。

レミアアのお見合い大作戦が成功しない理由である。

土台無理なのだ。

そう、出会いがあるだけ奇跡、と、呼ばれるくらいに……。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

さて、場面は変わり、紅魔館の玄関である門の前。

「今日は何か良いことが起こりそうな気がしますー!」

普段は居眠りをして時を止めるメイドにナイフをぶつ刺される門番、紅美鈴は何故か今日は起きていた。

理由は今朝、夢で、男とくんずほぐれづな行爲を行ったから、である。色々昂ぶってしまい眠ろうにも眠れないのだ。

「いやー!メチャクチャ良い夢でしたねー!なんだか身体の調子も良いですよ!」

独り言を話しながらも、高速で一般市民には目が追いつかないほどの蹴りを繰り返している。顔も、名前の通り少し紅い。

……おっと。ここで、我らがハイパームテキの登場のようだ。

「ふう。到着つ、と」

空から華麗に舞い降りたムテキ。黄金色の羽をはためかせながら、スタツ。と着地す

る。そして、優雅に自己紹介を、良く逆転したりされたりする赤い検事みたいな手振り
でし始めた。

「やあ、こんにちは。俺の名は一条開示。麗しい門番さん。ここは紅魔館で間違いない
かな？」

美鈴、あまりの出来事に固まる。

蹴りを繰り出した状態で時が止まる。

そして、顔が真っ赤に染まり、プシューと煙が立ち込めた。そして、

「きゅ、吸血鬼の男の人おおお!!」

その言葉を最後に、彼女の意識は途切れた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

【side カイジ】

「……た、立ったまま気絶してる……?」

ど、どうしよう?このままの方がいいかな?

『どうせなら運んであげましょう。そうした方が印象が良くなるかと』

「それもそうだな。それじゃ、ちよつと失礼して」

俺は美鈴をお姫様抱っこして門を押し上げて中に入った。…なあ、この世界、もしか
して男女あべこべ?

『美鈴の反応からして、その可能性は充分にあるかと。……面白くなってきましたねえ』
何がだよ……。

『ハーレム！ハーレム！ハーレム！』

さて、クソブタオタクナビは放っておいてさつさと咲夜さんあたりでも見つけますかね。

『あつちよ、無視しないでほしいでヤンスー！』

何故にパワポケメガネ族の口調なんだよ……。

名は体を表す

「赤い……」

『赤いですね。目に悪いです』

まあこれから住む（予定） んだし慣れとかなきやね。

「……」

……ん？なんか雰囲気変わった？随分と音が消えたけど。

『あたりの時が止まりました。警戒態勢を取ってください』

「警戒つたつてえっ?!」

ナイフが飛んで来た！俺は後ろに飛び回避する。

『上からくるぞ！気をつけろ！』

「つくー……白か……おあっ!?!」

ナビの警告にバツと上を見ると、踵落としを決めようと飛んで来る咲夜さんが見えた。スカートの中身も。

……口は災いの元つてのは本当なんだな。

本気のナイフ投擲だったぞ。まあ避けたけど。

何故か狙いもブレブレだったから避けやすかった。

…多分、止めたはずの空間で、俺が普通に行動できているからだろう。動揺でもしたのかな？

「な、何故貴方は止まった時の中で動けるのですか!？」

おおつと明らかに狼狽うろたえしておりますのん。

ここは、強者の風格を醸し出しながらドヤ顔で誤魔化そう。そして誤解を解こう。俺は喧嘩に来たわけじゃない。

「さあ? 何でだろうな? ……それはともかく、俺に戦闘の意思はない。ここに雇われに来たんだ。従業員募集していないか?」

あたふた咲夜さんは見えて微笑ましいが、話が進まないのを心を鬼にして本題を切り出す。

「従業員……? それは有難いですが、つて、美鈴?! 何があったんですか!?!」
『今更?』

うん。確かに今更だったな。ずっと姫さま抱っこしてたのに。

「俺を見て倒れたんだ。言つとくが、俺は何もしていないぞ? 挨拶したら急に意識をなくしてな。……所で、あんたは大丈夫なのか? 俺、男だが」

「え、男性?」

「……………気づいていなかったのか？」

「……………お、お嬢様ああああああああああああああああ!!」

「あつ、どこ行くんだよ!」

咲夜は、顔を真っ赤にして、逃げ出した!

『どうやらあべこべ世界で確定のようですね。後を追いましょう。この館の主人に接触するチャンスです』

お前は至つて冷静だな。……で、美鈴どうしよう?

『このまま運びましょう。辛いかも知れませんが、頑張つて!』

レベル30舐めんな。こんくらいなら問題ないさ。

あ、そういう時間どうなってる?

『既に解除されているようですね。正常に動作しているようです』

そっか。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

【side 咲夜】

男性が!男性が!吸血鬼の男性が紅魔館を訪れた!?

しかもイケメン!お嬢様の求めていた、吸血鬼の男性!

私は時を止めるのも忘れ、自身の出せる全速力でパチュリー様の図書館へと向かつ

た。

このビツクニュースを、届けるため。

美鈴のことなんて、この時は頭から抜け落ちていた。

そして、図書館入り口につき、バン！と開け放つ。

「わっ!?……なんだ咲夜じゃない。どうしたの？随分と息が切れているけれど」

私のらしくない行動にパチュリー様が心配なさっているが、それどころではない。

数回深呼吸し、心を落ち着かせ、不貞腐れて机に突っ伏しているお嬢様の目の前に立った。

私は意を決して、お嬢様に話し掛ける。

「お嬢様。顔をお上げください。嬉しいニュースですよ」

「…なによ。いい肉でも手に入ったの?」

あくまで顔をお上げにならないお嬢様。

それでも容赦なく、言葉を送らせていただきます。

「男性の、お見えです」

「さあ！案内して頂戴！その方は何処にいるの!？」

ガバツと顔を上げ、キラキラした目でこちらを伺う

お嬢様。分かりやす過ぎです。パチュリー様も呆れてらっしゃるじゃないですか。

れば一生独身のままで終わってしまいます！しっかり手綱を取ってくださいね！」

「ま、まつかせなさい！わつ、私のカリスマでイチコロりよ！」

ああ。噛みました。凄く可愛いですが、今のままではカリスマではなく『かりすま』ですよ？ギャグ方面で効果を発揮します。

……そろそろ、でしょうか。

私が逃げてしまった時に、通った道にナイフをとるところどころに落として来たので、こちらに来てください。というメッセージは送れている筈ですが……。

それなら、もうすぐ来る、でしょうね。

”カツン、カツン”

足音が聞こえて来ました。すぐそこまで来てらっしゃいますね。

「お嬢様。第一印象が大事ですよ！」

「セリフを噛むんじゃないわよ」

「わ、わかつているわ……」

”カツン、カツン”

「失礼する」

お、お見えになりました……！

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

【side カイジ】

「失礼する」

第一印象は吸血鬼らしく強気な印象で。

へたに、下手に出ても、返って印象が悪くなる可能性もある。ここは大胆に行こう。
……しかし、ここが図書館か。俺の地元の図書館より広いな。見渡す限りの本本本本本。

んで、その中央には、面接台がおかれ、俺からみて

パチュリー、レミリア、咲夜さんの3人が並んでいた。全員、俺の容姿をみて、ゴクリと生唾を飲み込む。……ナルシストとかじゃなくて、実際に聞こえたから仕方ないだろう？

あつと、観察だけじゃなくて、挨拶もしなきゃな。

俺は美鈴の時と全く同じポーズで挨拶を

「私の名は、レミリア・スカーレット！私は貴方に勝負を挑むわ！」

え？

「『え？』」

「勝負内容は簡易版チンチロリン！お椀にサイコロ3つを投げ入れ、出た目の数を足して一番大きな目になったものの勝ちの簡単なゲーム！私、咲夜、パチュリーの3人の合

計と貴方の3回出た目の合計を競う！勝利者は敗者に要求を突きつけることができる！以上！勝負は明日の朝にやるわ！それまでは、客室を用意するのでそこでゆっくりしていること！いいわね?！」

「あつ、はい」

「よし！言質は取ったわ！」

……えーと。

なあにこれえ？

勝負前夜

〔side カイジ〕

「……何故こんな事になったんだ？」

『突然の宣言でしたからね。ビックリしました』

現在俺は、咲夜さんに案内された客室のベットに横になってナジと会話をしている。話題はもちろん、チンチロについてだ。

あと、レミリアの考えの考察とかも。

「多分レミリアは俺との婚約が目的だよな？」

『おそらく。この男女あべこべ世界において、男性は数が少ないようだし、ましてや吸血鬼なんてもつといないでしょう。そんな状況下で舞い降りたチャンス。活かさない訳がありません』

だよなあ。

だけど、何故勝負内容がチンチロなんだろ？

『……確か、レミリアは「運命を操る程度の能力」を持っているのですよね？』

うん。それであつてと思う。

『そして、今回のチンチロのルールでは最強の目は、6+6+6=18。レミアアはこの目を運命を操る事により意図的に出して、勝ち確を狙っているのでは?』

あつ!言われてみればそうだ!てつきりリテンパってあんな事言い出したのかと思っただぜ。

『その可能性もなきにしもあらずですが…。まあ今は置いておきましょう。対策を講じるべきです』

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

【side out】

場面は図書館に戻り、運ばれてきた美鈴を小悪魔が看病しつつ、今回の件についての会議が行われていた。

「お嬢様!何故このような事を?!」

普段は冷静沈着なメイドでも、男性に嫌われてしまう可能性があるにもかかわらず、相談もせずに例の吸血鬼に提案したことは看破できないらしい。

「落ち着きなさい。きつと、レミイにも何か確信があったのよ」

荒ぶるメイドをたしなめたのは、レミアアの古くから友人、パチュリーだ。

だがしかし、その目は笑っていない。

鋭くレミリアを射抜かんとするような目つきで睨んでいる。

「うふふ。パチュリーの言う通り。結構、確信があつて行つたのよ」

だが、その視線すら涼しく受け流す。

流石カリスマと言つたところか。……カイジに会う前はセリフ囁んでいたが。

「……それはどのようなもので？」

「彼は吸血鬼なのよ？ ああ見えてプライドが高いと思つたの。だから、勝負を仕掛ければ必ず乗ってくる。…それに、チンチロだって、私にとつても有利なのよ？」

「……【運命を操る程度の能力】ね？」

「パチエ正解！ 私の能力を使えば、サイコロの目なんて思いのまま。下手にイカサマ

……そこそ456賽なんかを使うより簡単に勝てるわ。ねえ、こあ」

「はっはい！ そうでございますね！」

「……あの子まさか使つたんじゃないでしょうね？」

そのまさかである。

小悪魔は、一度チンチロでレミリアに勝負を挑み、敗北している。敗因はイカサマ。

456賽を使用したことがバレたのだ。

お陰で、しばらく休み無しで働かせられたそうなの。

完全に自業自得である。

「ま、今はそんなことどうだっていいわ。……だけど、今回のルールは咲夜やパチエ。貴方達も絡んで来るのよ？流石に、全ての試合を運命で操るなんて事したらつまらないもの」

「……分かったわ。何かしら考えておくわ」

「その為にも、予め、もう一度よくルールを決めておきましょう。何かあっても文句を言われないように」

「そうね。それじゃ実際にイカサマをした、こあも

交えて作戦会議といきましょうか？」

「はい！」

「わ、わたしもですかあ?!」

「……後で私の方からも罰を与えるから覚悟なさい」

「そんなー!?パチユリー様!ご慈悲をー!」

一体どうなる?!チンチロバトル!

開幕

〔20×
×年某日〕

〔ざわざわ…ざわざわ…〕

『いやあーすごい数の妖精さんですねえ〜』

（紅魔館ってやけに広いからな、その分掃除するやつも多いんだろ）

俺は今、紅魔館の図書館にいる。

目的はそれぞれの願いをかけたチンチロリンバトル。

何故弾幕ごっこじゃないのかは知らないけど、エグゼイドみたいに【ガシャコンキー
スラツシャー】を召喚できないから、肉弾戦でやるつきやない俺にとつては好都合だぜ。

「皆さん揃っていますね？それでは今回のチンチロリンのルール説明をさせていただきます、美鈴と」

「小悪魔です」

『なんかあの2人…特に悪魔の方のクマがすごいですけど大丈夫なんですかね？』

そんなこと、俺が知るか！

「今回のチンチロリンは本来のルールではなく、それぞれのチームが三回ずつ3つのサ

イコロを腕の中に投げ入れ、合計点が多い方のチームが勝利となります」

(…それもうちんちロリンじゃなくないか?)

『細けえこたあ気にしなくていいんですよお!』

俺達がそんなやりとりをしている間も説明は続く。

まあ、タダのチンチロリンだし相当無茶なルールでもなければ口は出さない。

「そして、これはかなり重要なことなのですが……このチンチロリン、それぞれの能力の使用が可能となっているのです!」

が、小悪魔の爆弾発言は流石に看破できないな!

「ちよつ、待った!」

『小悪魔さんそれちよつと紅魔館組有利なのは!』

ナビも新た全面的に同意らしい。ナビが言った事とほぼ同じことを小悪魔に伝えると、

「いえ、流石に賽を投げ込んだ後の干渉行為は厳禁です。ですが、その投げる前には魔法の使用や能力の使用はOKという事にしました」

という返答が帰ってきた。

……んーでも、それなら俺も能力(殆どナビのオートモードだけど)を使うし、問題ない……かな?

『ええ。このルールなら咲夜が賽を投げ入れた後に時を止めて出目を変える、という事が封じられていますからね……まあ、貴方には時止めが効きませんからどちらにせよ、と言ったところですが』

そーだな！

「そういうルールなら問題ないか」

「合意、と受け取ってよろしいでしょうか？」

「ああ」

さっきのでキャラが少し崩れたが、大胆不敵な態度は継続。強キャラ感だしておいた方がレミリアに気に入られてお願いが通りやすくなるかもだし！

「それでは早速始めていきましよう！」

▼美鈴が開戦を宣言した！

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

【side 紅魔館組】

「……ねえ、パチエ。あの子クマがすごいけどどうしたの？」

「ズルしたお仕置きとして1分が10分を感じる呪いをかけたのよ。まあ、24時間経てば元に戻るけれど……あの子昨日から寝てない様子だし、立っているのもやつとなんじやない？」

「…悪魔より悪魔してるわ…パチエ」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

まずは第1投。

『紅魔館組の一番バッターは咲夜！』

「(今回のルールだと私の能力は意味を成さない！だから自分の転生の運を信じる！)
フツ！」

『第1投、投げたアアアアアア！』

……サイコロがくるくると回っていき、1つ、また一つ止まっていく。

『注目の出目は……1、2、5！合計点8！最高値の半分もいかなかった！これには本人も悔しそうな顔を浮かべております！』

「次は俺だな」

咲夜さんから腕とサイコロを掠め取って賽を握りしめる。目を瞑り、ナビに体の操作権をゆずった。

(……本当に信じていいんだな?)

『ええ！私を誰だと思ってるんです?』

(計算高い面倒なやつ)

『酷いっ！……でもその中に照れ隠しが入ってると思うと萌えてきますよー！』

とかなんとか言いつつナビはサイコロを投げ入れた。

”カラカラ…ピタッ”

「なっ…!? 全て…6?!」

『これが俺の実力だ!』

……体の操作権利を渡している時はナビの奴も喋れるらしい。

その代わり俺は口出しできないが。

あつ、咲夜さん悔しそうにレミリアに謝ってる。

「申し訳ありませんお嬢様…ご期待に添えず…」

「……いいのよ、咲夜。ここから巻き返せばいいの。ねっ、パチエ」

「ええ。任せてちょうだい」

「お嬢様…！パチユリー様っ…！ありがとうございます、ございます…！」

涙を流す咲夜さん。

うん、この世界の紅魔館もいい関係が築けていてよかった…。

2次創作だとたまに敵対してる時があるしな……こうして仲よさそうなところを見て安心だぜ、なあ、ナビ？

『美しい主従愛ですなあグへへ、キマシタワァー!』

……色々台無しだわ！